静岡文化芸術大学創立20周年

特別鼎談

未来へつなぐ知と実践

～知の拠点であり続けることを基礎に地域へ、そして世界へ～

静岡文化芸術大学が創立20周年を迎えた。
脈々と受け継がれる創設時の理念から、日本の大学の在り方、未来のビジョンにいたるまで、
川勝平太・静岡県知事が有馬朗人・静岡文化芸術大学理事長、横山俊夫・静岡文化芸術大学学長とともに語り合った。

※この鼎談録は、静岡文化芸術大学20周年記念誌（今秋発行予定）からの抜粋です。

遠州・浜松との関わり

知事　静岡文化芸術大学の創立20周年、おめでとうございます。本学の理念を構想し、創設に尽力されたのは、京都大学教授の高坂正堯先生でした。高坂先生は開学前に他界されましたが、幻の初代学長として多くの人が記憶しています。実際の初代学長は、東京大学の名物教授だった木村尚三郎先生ですから、本学は京都大学と東京大学という、高い知性の和がつくり上げた大学です。

現在は元東京大学総長の有馬先生が理事長、元京都大学副学長の横山先生が学長です。大学の誕生から現在まで、最高の先生に恵まれたことを誇りに思います。

有馬氏　私が浜松に来たのは小学6年生の時。神奈川県の相模原でのんびり過ごしていましたが、浜松の西小学校に入学すると毎日が勉強で大変でした。浜松一中（現・浜松北高等学校）の2年時は勤労動員が始まり、中島飛行機（株式会社SUBARUの前身）で旋盤工として働きました。今思えば、その時代に技術を身につけたことは、人生において非常に重要でした。中学3年時に父が亡くなると、それからの生活は大変で、（旧制）高校進学まで慌ただしい時代を浜松で暮らしました。

一方で、模型のモーターや電池式のラジオを作ったり、浜松高等工業学校（現・静岡大学工学部）で高柳健次郎先生のテレビジョンを見て、「将来は物理をやろう」と決めたのも浜松です。

浜松の面白さは、やはり「やらまいか」ですね。その精神を最も体感したのは、戦争直後、GHQが軍国主義的な指導をした先生を辞めさせるという事態になった時です。浜松一中でも3人の先生が対象になりました。すると何人かが〝やらまいか精神〟を発揮し、生徒を50人ほど集めて「先生は軍国主義ではない」と記した書状に血判を押し、GHQの下請けをしている人へ提出しました。その結果、先生方は退職せずに済みました。

横山氏　いいお話ですね。浜松には「言霊の幸はふ国（霊力ある言葉がさかえる国）」を意識させられるところがあります。有馬先生の初期の俳句には、浜松近郊の春の夕暮れや、雨雲の下の田植えの風景が詠まれ、叙景に優れ、真淵の万葉調に通じるところがあると思います。真淵が讃えた万葉歌の精神とは、自分の気持ちを押し付けずに、すっと目に入ったままの景色を詠むところでした。木村尚三郎先生も言葉選びに長けた方で、本学10周年「ふりかえれば未来」は、木村先生の著書のタイトルを使わせてもらったようです。

どの先生も飄々とされていますね。私は遠州という場所が、そういう人柄をつくるのではないかと思っています。

学問と生活が一体のオックスフォード

有馬氏　お二人は学生としてイギリスのオックスフォード大学にいらしたそうですが、私は研究者としてふた夏を3か月ずつ暮らしました。教育全般に関しては、イギリスの大学教育はいいですね。特にチューター制度が優れていると思います。1人の先生が一人一人の学生と議論し、時々食事を共にする機会を設けながら指導し、学生たちもみんな寮に入って互いに切磋琢磨するという、そんな教育方法を日本でも実現できないものかと思います。

知事　オックスフォードは学問と生活が一体の大学町です。日本でも、かつて東大寺、金剛峯寺、延暦寺などが、最高学府の役割を担っていました。ただ、明治期に物理・工学・法学・医学などの洋学を輸入した際、知識をなるべく早く頭に詰めこむことを優先したため、学問と生活がばらばらになりました。

横山氏　知識を輸入し、いかに効率良く吸収するかが当時の日本の大学の主な役割でした。ですから、機能的な組織にはなりましたが、反面、共同で生活する場という性格があまりないですね。

有馬氏　みんなで一緒に朝食をとるでしょ。あれはとても良いですね。

横山氏　セミナーの翌朝、メンバーの多くが一緒に朝食を囲みます。すると「昨日はあのような発表をしたけれど、実はこういう点が足りなかった」という話が出ます。大事なことは、肩の力を抜いた朝食のときに出てくる。面白いですよ。

有馬氏　そんな大学を日本につくれないか、というのが私の長年の希望です。

静岡文化芸術大学理事長

有馬 朗人氏

1930年生まれ。大阪府出身。東京大学理学博士。ニューヨーク州立大学ストニーブルク校教授、東京大学理学部教授、同大学総長、理化学研究所理事長などを経て、文部大臣、科学技術庁長官就任、文化勲章受章。2010年より現職。

静岡文化芸術大学学長

横山 俊夫氏

1947年生まれ。京都出身。京都大学大学院法学研究科修士課程修了。オックスフォード大学哲学博士。テュービンゲン大学客員教授、京都大学人文科学研究所教授、同大学院地球環境学堂教授、京都大学副学長などを経て、2016年から現職。静岡県文化政策審議会委員。

遠州学林の確立を目指して

横山氏　2年ほど前から、有馬先生と「遠州学林」をつくりましょうと話しています。人が集まる場所に、滞在したり、暮らしたりして、初めて学びの文化が伝わると思うからです。浜松には浜松医大や静大工学部などの教育機関もあり、大勢の研究者がおられます。また、ヤマハやスズキのような企業には海外から多くのデザイナーや技術者たちが来ています。彼らはたいていホテル泊で、仕事が終わればすぐに帰国しますが、浜松に滞在する多彩な人々が対話をすれば、有意義な時を共有でき、学生にも教育の場になります。そして、たとえば天竜の奥に千年も続く芸能の価値を共に考えてみる。そんなことができれば「遠州学林」は、この土地ならではの名所になります。

知事　分野を超えた交流で生まれる知恵が、生活や産業に活かされれば、天・地・人が調和する新しい文明を提案する大学のモデルになる。「遠州学林」にはそんな予感がありますね。

　そもそも本学は「文科系の大学を」という地元の要望を受けて、高坂先生が基本構想を練りました。戦前の日本は軍事力、戦後は経済力を重視しましたが、21世紀は文化力が大切になるというのが高坂構想でした。

　美意識と有用性の融合、芸術的感性と工学的知識を合わせたのがデザインです。それは新しい実学です。その構想をもとに、本学はデザイン学部を設置しました。

　教員・学生・町の人たちが時空間を共有する、オックスフォードのカレッジのような「遠州学林」を〝やらまいか精神〟でつくっていただきたい。

横山氏　〝やらまいか精神〟といえば、本学の隣の「野口町」の皆さんも熱いですね。万葉集に詠われる「曳馬野」の入り口ということで野口と言われますが、古い家筋が多く残り、浜松まつりにも熱い方が多い。本学の20周年式典には「ぜひ激練りで祝いたい」とおっしゃるほど。そうした地域の応援もかなりあるので、いよいよ新しい大学のかたちを試みる機が熟していると感じます。

知事　本学の原点には町の人たちの熱意があります。いわば遠州の町衆がつくった大学です。浜松を中心に、遠州人が力をあわせ、新しい実学の府にしていただきたい。そのためにも「遠州学林」の実現が待たれますね。

有馬氏　私はやはり浜松は賀茂真淵だと思います。家康は偉大ですが、もう一人、賀茂真淵の存在をもっと認識するべきでしょう。

知事　江戸時代にさかんだった儒学は中国の古典。賀茂真淵は、外国の古典ではなく、日本の古典を追求して、わが国の古典として万葉集を研究し、真淵の弟子・本居宣長は古事記を研究しました。まさに〝やらまいか精神〟の発露が生んだのが国学です。賀茂真淵は日本の古来の心を取り戻す回転軸となった存在です。

有馬氏　国学を確立したわけですね。

知事　遠州は江戸の文化と京都の文化が東海道で融合するところ。独特の風通しの良さがあり、他の地域と比べると、平等感が強い。そうした風通しの良さが権威や既成の秩序に対しても遠慮をしない〝やらまいか精神〟を生んだのではないかと思います。

世界の文化が融合する拠点として

有馬氏　本学にはブラジル系の日本人学生が在籍しているので、南アメリカとの関係をもっと強化し、日系ブラジル人を日本へ招き、本学で学び、日本で活躍してもらえたらと思っています。

　他方、本学には英語・中国語教育センターもあります。中国の方をもっと呼んで、ここ遠州を、中国との関係をより進展させる国際的なセンターにできないだろうかとも思っています。

知事　浜松は、江戸と京都の中央に位置し、東西の文化が融合する場所柄。これからは人種や宗教、肌の色などで差別されることのない「世界の人たちの文化が融合する場所」として発展してほしいですね。学問は普遍的なもので人類の財産。本学を起点に広く情報を発信してください。

横山氏　技術の進歩とともに、パワフルなもの、便利なものが今後も世に出てくると思います。しかし、それを生活にどう活ようなかたちに落ち着くのか、という議論を、直近の利害から離れて深められるのは大学です。そのときは大学関係者だけでなく、町をあげていろいろな対話を重ねていくことになります。創立20周年を、新たな学問の拠点を築く、大きな節目にしたいと思っています。

教員、学生に向けての今後の期待と要望

知事　新しい時代を拓くのは文化力です。国づくりのデザイン、地域づくりのデザイン、物づくりのデザイン、場合によっては地球や社会のデザインも含め、その発信拠点が本学です。本学の新しい使命を先生と学生に自覚していただき、グローバルな視点を持って、地域に立脚した実力を身につけてもらいたいと思います。

有馬氏　中国や韓国など、アジアの人たちに大勢来ていただき、日本の文化と自国の文化を比較しながら共に学ぶような、アジアの中心を成す大学になればいいと思っています。そして、デザインを中心にアジアやヨーロッパの文化を取り入れ、世界的に必要とされるものをつくり上げてほしい。デザイン分野だけでなく、国際関係分野、さらには大学院まで含めた学問の中心になっていくことを望みます。

横山氏　今の教員、学生、あるいは応援してくださる地域の方々が、自分の言葉、常の言葉で語り合えるようなキャンパスをつくっていくことが、新しい学問の基本になると思います。専門用語は噛み砕き、皆さんで語りあえる言葉で学問をつくり直すという、熱い場所をここに開いていきたい。いわば、現代に求められる「言霊の幸はふ国」という夢に向かって、歩みを進めたいと思います。

静岡県知事

川勝 平太

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。